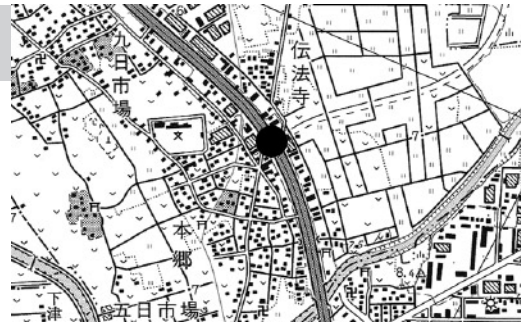


でんぼうじほんごう

伝法寺本郷遺跡

所在地 一宮市丹陽町伝法寺地内
 調査理由 県道高速清洲一宮線建設
 調査期間 平成 13 年 4 月～6 月、9 月
 調査面積 1,600 m²
 担当者 石黒立人・鵜飼雅弘・早野浩二



調査地点 (1/2.5 万「一宮」)

調査の経過 伝法寺本郷遺跡は、一宮市丹陽町伝法寺地内に位置する。本遺跡の発掘調査は県道高速清洲一宮線建設の事前調査として、名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。調査対象は橋脚部分のみ 7 工区、合計 1,600 m²で、国道 22 号線伝法寺交差点の以北に A～C 区の 3 調査区、以南に D～G 区の 4 調査区を設定し、A～D 区を平成 13 年 4 月から 6 月、E～G 区を平成 13 年 9 月にそれぞれ調査を実施した。

立地と環境 本遺跡は自然堤防と後背湿地が連続する五条川右岸、標高 6 m 前後の沖積平野に立地する。周辺には北東 1.5 km 圏内に伝法寺廃寺、元屋敷遺跡、伝法寺野田遺跡、権現山遺跡など、弥生時代から古代にかけての遺跡が点在する。

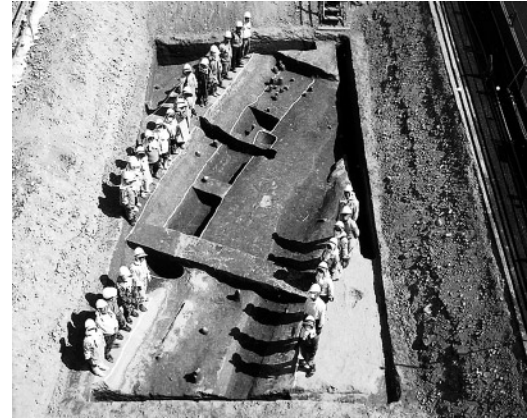
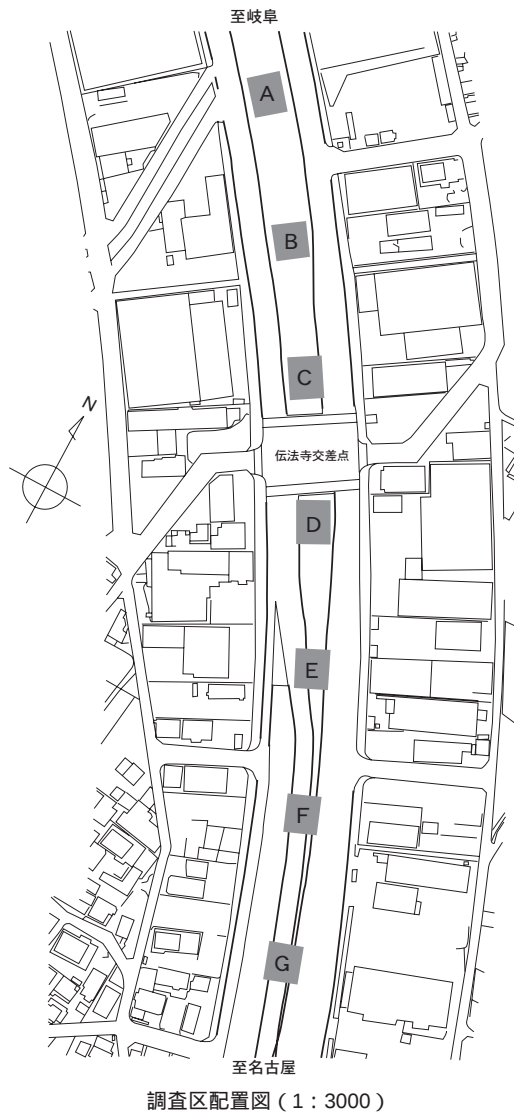
調査の概要 調査の結果、本遺跡は古代・中世を中心とする時期の遺跡であることが判明した。古代の遺物包含層と遺構は古い微高地に相当する D 区において濃密で、その周囲の調査区は後背地あるいは旧河道に相当する。中世には沖積化の進行によって新たに微高地化した A・B 区を中心に遺構が展開する。

A・B 区 A・B 区は古代においては旧河道域に相当する。この旧河道は中世に至るまでには埋没し、その周辺は微高地化する。この微高地を形成する粗粒砂層の上面では中世の遺構が検出された。A 区ではほぼ南北方位をとる溝群を検出し、これらの溝群は中世から近世にかけて幾度も再掘削されたことも確認された。なお、A 区の河道からは大量の自然木とともに黒笹 14 号窯期の灰釉陶器碗が出土している。

C・D 区 C 区の大部分は後背地に相当し、近世以降の水田を検出したのみにとまる。一方で C 区の南東部から D 区にかけては古い微高地が広がり、D 区では竪穴住居 2 棟 (S B 01、S B 02) をはじめとする古代の遺構群を検出した。S B 02 では竈が比較的良好に残存しており、燃烧部の火床面では須恵器無台碗が伏せ置かれた状態で出土した。これらの遺構の時期は折戸 10 号窯期を中心とする。

C 区の下層では、黒～黒褐色粘土の上面において小区画水田を検出した。作土および床土からは土師器の細片がえられたのみで、水田の時期は明確にされないが、他遺跡の水田遺構との比較から、古墳時代の可能性が高いと考えられる。なお、この黒～黒褐色粘土層は B 区の南東部から G 区にかけて広範囲に認められることから、遺跡周辺には広大な水田景観が広がっていたものと推測される。

E・F・G 区 E・F・G 区では、近世以降の水田と島畠が連続して検出されるのみで、遺構、遺物ともきわめて希薄であった。
 (鵜飼雅弘・早野浩二)



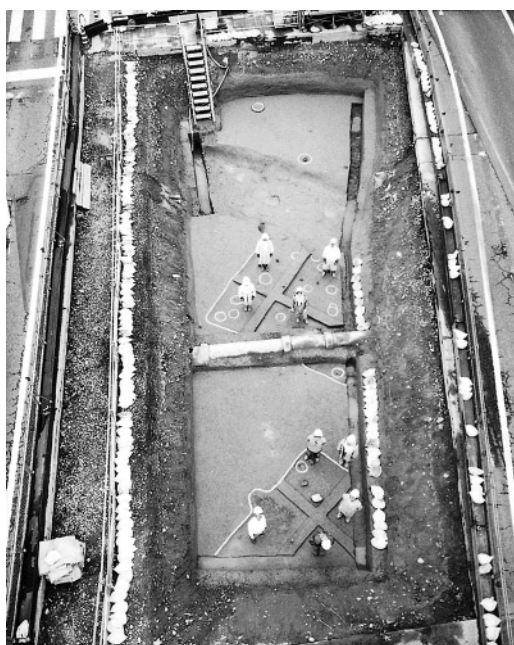
A 区 全景 (中世)



A 区 旧河道出土灰釉陶器碗



C 区 古墳時代水田



D 区 全景 (古代～中世)



D 区 SB02 竈